ISSN 1344-5715

Bulletin of Tokyo Kasei Gakuin University Library

東京家政学院大学 図書館報

平成22年3月5日 第56号

発行者 東京家政学院大学
附属図書館
〒194-0292 東京都町田市
相原町2600
電 話 042(782)9815
印刷所 (株)栄文舎印刷所

何故という考えを持つ心を

田中 清章

私は文字中毒人間である。自宅や研究室には数千冊の小説があり、常に鞄の中にも一冊の本をしのばせている。私の好んで読む小説には変な癖がある。第一に特定の作家に偏っていること、第二はその作家のすべての作品を読破すること、第三に活動的な分野で屈強な主人公がいること、第四は文中の情景描写が簡略で容易に想像できること、第五に登場人物が少ないことなどである。

昨今、我が国のような識字率の高い国や地域において、書籍や新聞など、文字媒体の利用率が低下し、活字離れや読書離れという言葉が社会問題のひとつとされ、新聞社や出版業界などがキャンペーンを行っている。識者の間では言語能力や知的能力の低下、勉学意欲の減退現象など悪い面だけが強調されているが、本当にそうなのだろうか。TV、インターネットや携帯メールなど私たちが普段親しんでいるものは巨大な活字媒体ではないのか。最近のTV番組でも話し言葉がテロップ活字になって流れている。以前は、このようなことはなかったと思う。20年以上前、台湾の高砂族伝統的集落と民居の現地調査に訪れたとき、あらゆるジャンルの番組で繁体語字幕が流れていた。その理由を尋ねると、登場人物が喋っているのは北京官語で発音のみではいろいろ意味があるため、正確に理解するために必要と聞かされ、驚いた記憶がよみがえってくる。アメリカのGFKNPOの調査データでは本・新聞・雑誌などの活字媒体を読む時間は30国平均で6.5時間(週)、インド、タイ、中国、フィリピン、エジプトが上位5カ国で、韓国、日本、台湾、ブラジル、イギリスが下位5カ国である。また、無読率について『読売新聞読書週間世論調査』では、全体的に50%を推移しているが、特に、学生層の読書量減少が顕著で昭和60年に1割だったものが平成17年には4割弱へ増加している。このことは、図書館の機能や用途などをこのような事象に対応する機能を付加し、変容しなければならないことを物語っているのではないだろうか。

話は変わるが、最近、面白い本に出会った。その内容は理屈では分かっているのだが 何か変だな、これは間違っているのでは というものである。しかし、読み進むと 妙に納得させられる 本で「環境問題はなぜウソがまかり通るのか」(武田邦彦著/洪泉社/2007)といい、そのテーマは近年盛んに叫ばれている環境とエコロジーの問題に対してアンチテーゼを示したもので、その巻頭言には 錦の御旗と化した「地球にやさしい」環境活動が、往々にして科学的な論議を斥け、人々を欺き、むしろ環境を悪化させている! とある。その一例を挙げると、「ペットボトルをリサイクルすることで資源を7倍使っている」とか、地球温暖化による気温上昇については「過剰な悲観論は不要」と、過激な疑問や意見及び理由を提示している。一読して非常に怪しく矛盾した議論・意見のように思えるが、ある一面では重要な指摘事項を含んでいる。言い換えれば、きわめて多くの問題や課題に関して多方面からの検討や考え方が必要なことを示している。あらゆる事象には種々の考え方があり、答えは一つという考え方から最上策の答えとして認識するべきだであり、そして、最も重要なことは"何故という考えを持つ心"が、その解決策を導き出すことができるのではないかと云うことである。

(附属図書館長)

第五十六号 目次

何故という考えを持つ心を 田中 清章
育苗的共育実践私記 —一冊の本との再会から— 新田 義則
「不思議な数eの物語」 細渕 昌美
近代食文化研究と大江文庫 —「近代料理書の世界」の執筆を通じて— 東四柳 祥子
「外国人力士はなぜ日本語がうまいのか?」 森 朋子
今も昔も —横浜絵— 空から本が降ってくる —電子書籍端末の行く末— 土屋 富雄
寄贈著書紹介
資料の紹介 「小児必要養育草 巻一〜六」 小野 眞理子

育苗的共育実践私記
―一冊の本との再会から―

新田　義則

授業で用いる配付資料に目を通していて、ある一文に目が釘づけになった。「D.McGregorが農業的教育について語っている」と書かれていたのである。

D．マクレガーは、マネジメントの分野でX理論・Y理論を提唱した著名な研究者である。学生時代に彼の主著『企業の人間的側面』を読んだが、農業的教育については記憶に残っていない。本棚から古びた本を取り出して読み返してみたが、なかなかそのことが出てこない。ようやく最後の結論で見つけたときは、年甲斐もなく小躍りした。どう思い起こしてみても、この個所を読んだ記憶が蘇ってこない。多分、当時、本文を読んだだけで分った気になり、結論部分は読み飛ばしてしまったのだろう。読んでいたとしても、学生の私のアンテナには、引っかからなかったのかもしれない。

結論の数行で簡単に述べている彼の趣旨は、「Y理論という新しい人間観に基づく人材の育成は農業的教育に依拠しなければならない」というのである。

今になって、錆びて感度が鈍くなったアンテナで「農業的教育」という言葉を、キャッチ出来たことには、故がある。漠然としたものではあるが、学生教育について考えていたことがあるからである。

学生は苗木、いずれ家政学院を巣立って行く。彼らが根を下ろすのは世界のどこかである。少なくともキャンパスではない。私の学生教育のイメージはこのことから始まる。学生は仕事に、家庭に、人生において、それぞれの場で大木に育つことが期待されているのである。私は社会から預かった資源を盆栽に仕立てるつもりはない。育てるのは、天に向かって大きく育つ木である。

大学は、その苗木を大事に育てる場、苗木を育む苗圃である。ついでに言えば、苗圃・苗床のことをラテン語でZeminariumといい、ゼミナールというドイツ語の語源になっている。ゼミという教授法が苗床を意味することは興味深い。

そこにおける我々教員の使命は将来に向けて苗木を育てることである。その基本的な役割は、光を当てること、つまり「一人ひとりを見つめ個性を尊重すること」であり、水やりを忘れないこと、すなわち「良質の題材を用意すること」であり、肥料を施すことは「機会を与えること」でなければならない。それとともに、苗圃としてのキャンパスは、丈夫な根が張れるよう肥沃な土壌でなければならないが、これは家政学院の伝統・文化・風土と関係しており、教員、職員および学生が一体となって耕すべきものである。

授業でもこのような姿勢で臨んでいるが、とくにキャリア教育では、単に規格品の××戦士を育てるのではなく、このような観点からの人間教育がなければならないと考えてきた。そんな矢先、就職課職員のS氏から「キャリア教育に農業を取り入れたらどうなるだろうか」という問いかけがあった。農業体験の機会を用意してキャリア形成の選択の幅を拡げてやりたい、というのが彼の問題意識であった。確かに、「キャリアデザイン」の科目の中に農作業を取り入れることによって、自然や大地の営みに触れさせ、人間として生きる力を得る機会となるかもしれない、と私は考えた。同時に、私の育苗的教育の可能性あるいは限界を見極めてみたいという思いに駆られた。このような経緯から、平成二十一年三月、KVAオーガニック・ファーム・プロジェクトを立ち上げた。

教育に農業を取り入れる意義として次のことを考えている。

■育てることを通じて育つこと

学生は、学校で育てられる対象として生活している。それが教育機関の存在理由であるが、学生には、育てることで育つという側面もあるのではないか。また、学校教育の中で比較的なおざりにされてきたことではないのか。農業を通じて、このことの意味を考えてみたい。

一方、教える立場の教員の役割についても、教えることは学ぶことであるということを再認識する必要がある。教員にも学生を育てることを通じて自ら育つことがなければならない。まさに共育の実践である。一教員として、このことにも挑戦してみたい。

■見えないものに眼を向けること

もちろん、作物を育てる楽しみ、収穫したときの喜びもある。しかし、それは見える世界の話である。もっと大事なことは、そこに至るプロセスであり、作物を見て土中の根に思いを馳せる気持ちであり、作物が持つ生命力とその生命を育む土の力を感じ取ることである。

「農夫」について、こんな喩えがある。上農は見ずして取る、中農は見て取る、下農は見て取らず。畑の雑草取りの話であるが、このことは農夫に限ったことではない。人生に真の実りをもたらすものが、上農の見えないものを見る力ではないだろうか。

一方、世の中の動きを観察してみると、表面的、現象的、刹那的な事柄に振り回されて右往左往していることが少なくない。本プロジェクトを通じて、学生とともに、じっくり腰を据えて物事の本質に迫ることをやってみたい。

■長い時間軸で物事を捉えること

土づくりも人を育てることも手間や時間のかかることである。「キャリアデザイン」もKVAファーム・プロジェクトでも、その労を惜しまず、長い目で見て育てていきたい。学生に対しては十年の時間軸で見つめていきたいし、生命力を育む本物の土にするには最低でも五年は必要である。学生の

時間軸も長くしてやりたいと考えている。目先の目に見える結果だけを追い求めるのではカリキュラムが育たないし、肝心の人間教育も形だけのものになるだろう。

やるからには、こだわりをもって取り組みたい。農地に冠した「オーガニック」が我々の活動の基軸である。

先ずは有機農業、その基本となる土作りのために、発酵技術を駆使して有機堆肥や有機肥料を自前で作ることから始めようと考えた。有機資材となる広葉樹の落ち葉がキャンパスを舞っている。これを活用しない手はない。手作りのKVA Recycle Plant（堆肥場）では、落ち葉とともにKVA祭で回収したエコトレーが、今、静かに発酵熟成している。人間の健康の源である発酵物が作物に悪いはずがない。それを土に還し、学生とともに有機野菜の味と香りを確かめたい。心なしか、ファームに鳥や虫が集まってくるようになった。ファーム周辺の芝地に学生たちがもっと足を運び入れるようになることも願っている。

オーガニックのもう一つの課題は、我々の活動自体を有機的に展開することである。現在の活動メンバーは十人である。メンバー間に一応の取り決めはあるが、「ルールは破ってはいけない。しかし、それをただ守るだけではいけない」というのが基本的な約束事である。ルールとか常識を超えるところに気づきが生まれ、創造の世界が拡がっていくからである。学生が、農作業中に汗を拭きながら呟いた一言「（今、私は）大学らしくない空間に居る」という言葉を耳にしたとき、爽やかな風が渡っていくのを感じた。

農場にたたずむ大江スミ先生の写真がある。先生が手にしておられるのは日傘である。いずれ、私に杖の支えが必要になったとき、KVAファームを背景に土の香りとともに一枚の写真に納まるのが、夢である。技術の進歩によって、その頃には匂いまで写せるカメラが出現しているだろう。

マクレガーの本と三十数年ぶりの再会を果たし、それが切っ掛けとなって思いが巡り、仲間が集い、世界が広がり、夢が膨らんでいる。

（教授）

本の周辺

不思議な数ｅの物語

The Story of a Number

細渕　昌美

Ｅ．マオール著、伊理由美訳
岩波書店　1999年発行

「本の周辺」について図書館から依頼を受けたとき、頭に浮かんだのは、「不思議な数ｅの物語」でした。ｅは円周率のπとともに数学では重要な数ですから、授業でも折に触れて説明をしています。

この本の目次の中に、「垂れた鎖」という章があります。鎖の両端を持ってだらんと垂らした形で、一見、放物線のようですが、そうではなく、ｅを使った式になり懸垂線とよばれています。懸垂線を上下逆にして建造物にしたものがアメリカのセントルイスにあり、写真もこの本に載っています。これには興味をそそられました。数学と建築が結びついた！

πは小学校で習いますが、ｅは極限を使うため高校の微積分で登場します。直接的には、ｅは指数・対数の底ですが、連続複利計算で得られること、双曲線の面積と関係することなど、もうエピソードが満載です。ｅだけでなく、「数の歴史物語」とよべる本です。

２年前にセントルイスへ行き、ゲートウェイ・アーチを見て来ました。ミシシッピ川の西岸に、192ｍの巨大な姿がありました。設計者のサーリネンは自宅の地下室の壁にかかっていた鎖の形から着想を得た、と言われています。

（教授）

近代食文化研究と大江文庫

『近代料理書の世界』の執筆を通して

東四柳　祥子

二〇〇八年七月。私は、当大学名誉教授江原絢子先生とご一緒に、『近代料理書の世界』（江原絢子・東四柳祥子共著、ドメス出版）を上梓する機会に恵まれました。本書は、明治期から昭和初期にかけて刊行された約八〇〇種の料理書目録の作成、さらにその中から選出した特徴的な料理書一〇〇種の解題を通して、近代食文化の特質を明らかにすることを目的としたもので、その完成までには、楽しく豊かな時間でありながらも、約六年という歳月が流れていました。

この本の完成の陰には、何といっても一番身近なところに、大江文庫があったからとお話しても、過言ではないと思います。

そもそも私と大江文庫を引き合わせてくださったのも、江原先生でした。その頃の私は、「何かしら料理に関わる仕事にたずさわりたい」という想いを漠然と抱きながら、東京女子大学で英文学を専攻しておりました。とはいえ、どうしても断ち切り難い料理への憧れは、料理番組や料理雑誌のアルバイト経験などを通して、自分なりに満たしてはいましたが、食関連に従事される方々との出会いが度々訪れる中で、いつのまにかその想いは、

近代料理書の世界

「食文化をきちんと語れる人間を目指したい」という明確なものに変わっていったのを覚えています。

それを機に、もともと料理書や食文化関連書籍の蒐集が趣味でもあったことから、それらを夢中で読みあさる生活に傾倒いたしました。ご縁とは不思議なもので、手に取る書籍の中に、幾度も江原先生のお名前を拝見し、その偶然はいつしか「この先生の下で学びたい」という願望を芽生えさせていました。

その後、当大学大学院に進学し、江原先生からの研究指導を仰ぐ中で、先生はいつも「原典にあたることの重要性」を強調されました。そして、近代食文化史を専門とする私に対して、すぐ傍にある大江文庫で、当時の料理書に直接あたりながら調査できることが、何より時代の様相の理解を確かなものにしてくれると教え諭してくださいました。

こうして始まった研究生活の中で、大江文庫所蔵の近代料理書からは、近代日本の食生活を紐解くヒントを数多く学ぶことができました。例えば、調理法における分量や時間の明記、経済や栄養を考慮した一日三食の献立を計画するといった合理的な考え方などは、近代以降に西洋からもたらされた新しい特徴といえます。

また、『四季の台所』（一九一〇）という家庭向け料理書には、調理法とは別に、著者中川愛氷のエッセイ「箸餘閑筆」が収載されており、食べ歩きを通してみた「縄暖簾」での食事の実態、さらには明治の統計学者柳澤保惠伯爵家の一年間の食事献立を、理想的な献立例として掲載するなど、具体的な食生活の概況が詳らかにまとめられています。

西洋料理書之栞

いっぽう、大江文庫には、海外の料理書も多数所蔵されているため、同時期の料理書との比較調査も叶い、その関係性を実証できた時の達成感は、私にとって、今の研究をより一層深めたいという気概にも繋がりました。なかでも、英国ヴィクトリア朝に活躍したイザベラ・ビートンの『家政読本』の原書が所蔵されていることを知り、直に内容を拝見できたときの感動は今でも忘れられません。英文学を学んでいた頃から、ビートン夫人の伝記を宝物にしていた私にとって、この出会いは望外の喜びでした。さらに、大江文庫には、それを参考に翻訳したとされる『家庭実用西洋料理之栞』（一九〇七）も所蔵されており、日本の料理書に及んだ英国料理の影響について、真摯に考える大切なキッカケともなりました。

実際、大江文庫で出会う、どの資料の貸出カードにも、江原先生の貸出記録が見受けられ、研究を志す者として、先生に続くいい仕事がしたいという熱い想いにかられたことも、今懐かしく思い出されます。

大江文庫は、いつも私に新しい世界をみせてくれました。これからも大江文庫の高い価値を外部へ伝えていけるような研究に、着実に励んでいきたいと思っております。

（非常勤講師）

本の周辺

『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか？』

（宮崎　里司著　明治書院 2006 年発行）

森　朋子

相撲ファンならずとも、現在の角界における外国人力士の活躍を知らない人はいないだろう。モンゴルをはじめ、ブラジル、中国、韓国、ロシア、グルジア、チェコ･･･と出身地は世界各国に及んでいる。

その外国人力士達が一様に私達を驚かせるのは、日本語のうまさである。「勝ち負けを意識せずに自分の相撲を取り切るだけっス」等、耳で聞いているだけでは日本人と区別がつかない人も多い。同じ外国人でも、野球やサッカー選手の日本語とは「自然さ」が比べものにならないのだ。なぜ力士だけが、このような日本語を習得できるのだろうか。

その疑問に答えるのがこの本である。本書は、著者が力士本人および周囲の人々への取材の結果を日本語教育研究者としての目を通して書いたものだ。

朝から晩まで日本語のどしゃぶりの雨に打たれ続けるような力士の言語環境を、著者は、まさにイマージョン・プログラム（目標言語に浸るようにして習得する方法）そのものであると指摘しているが、同時に目標言語で常に話しかけ、自分で話せるようになるのを待つ「ナチュラル・アプローチ」という教授法そのものでもある。両方とも、母語を習得した時の様に外国語を自然に身につけるための言語習得方法であるが、成人になってから、そのような環境に身をおける人はめったにいない。

しかし、言語習得や教育理論など何も知らないままに、必要に応じて、見事な日本語を自然に身につける人達、身につけさせる人達がこの日本にいるということは大変面白い事実なのである。本書は、その様子を伝える１冊である。

（准教授）

今も昔も ―横浜絵―

昨年横浜は開港一五〇周年記念にあたり様々なイベントが行われ賑わった。江戸時代の末に横浜港が開港した際も大いに賑わい、その様子が錦絵に描かれ、横浜絵と呼ばれている資料がある。

横浜絵とは横浜開港（一八五九年）当時の風景を題材とした錦絵で、西欧人や中国人などの外国人が横浜で生活している姿や商売をしている姿が描かれている。当時の情景・風俗が分かりやすく伝わる資料である。

当館でも何点か所蔵している。そのうちの二点を紹介する。

○外国人衣服仕立之図　　歌川芳員（よしかず）画

ミシンを使い裁縫をしている西欧人の女性と右奥にはアイロンがけをしている女性の姿が見える。また、左奥には男性と子供たちの姿が描かれている。

絵師の歌川芳員は早くから異国風俗に強い関心を持ち、多くの横浜絵を残したため、横浜絵の先駆者の一人といわれている。

○横浜異人館之図　　歌川広重二代画

横浜に建てられた異人館の様子を描いたもので、西欧人だけでなく中国人も多く描かれている。当時通訳として多くの中国人が入国したようだ。左側にある「南京へや」では日本人と中国人で商談を行っている。

絵師の歌川広重二代も横浜絵を描いた絵師として著名である。晩年は横浜で輸出用茶箱に貼付する版画を描く。そのような版画を西欧人が見て、「ジャポニスム」が起きたといわれている。

から取り込み楽しめる携帯型の専用端末機である。現在の普及台数は全世界で累計 300 万台、シェアはアマゾン・ドット・コムが6割以上、ソニーなどが続いているとされており、米国調査会社によると 2013 年には出荷台数が2860 万台と予測されている。

日本においては、1999 年に i モード、EZweb が開始し、高機能化した携帯電話が普及しており、特殊なカテゴリーではあるが 2007 年にブームとなった「ケータイ小説」は間違いなく電子書籍であり、大画面の携帯電話やスマートフォーンの普及によって、すでに電子書籍普及のインフラは整っているいえる。

筆者は未来学者でもないし無責任なジャーナリストでもないので、電子書籍・電子書籍端末の将来がどのようになるのかを予想する気はない。これまで 40 数年間情報通信業界と関係してきて感じることを２点だけ挙げておく。

まず、電車の中で日常的に、携帯電話でニュースを読んだり、ネット配信の文書を読んだり、あるいはテレビを見たり漫画を見たりしている日本で、果たして携帯電話以外に電子書籍専用端末を持って歩く人がどれだけいるのだろうか。

次に、最近の情報通信システムの動向の特長として挙げられるのが「断片的な情報」の流布である。その典型がツイッターであり、SNS や「ケータイ小説」もそのカテゴリーの一つといえる。新聞のニュースなどは「断片的な情報」に近いかも知れないが、「書籍」の多くは断片的ではなく体系的な情報である。あなたは、源氏物語を電子書籍端末で読む気になりますか？

（教授）

本学教員寄贈著書紹介

平成21年に寄贈を受けた本学教員の著作等を紹介します。ご寄贈いただきましてありがとうございました。今後も著作物出版の折にはご寄贈いただければ幸いです。

天野正子（学長）
- 第三期の女性　学文社 1979
- 女性ニューワーク論　有斐閣 1989
- 「モノと女」の戦後史　有信堂 1992
- 「生活者」とはだれか　中央公論社 1996
- 団塊世代・新論　有信堂 2001
- 愛したくなる家族と暮らし　PHP 研究所 2003
- 近現代日本社会の歴史　吉川弘文館 2003
- 「つきあい」の戦後史　吉川弘文館 2005
- 老いへのまなざし　平凡社 2006
- 「男らしさ」の現代史　日本経済評論社 2006
- ジェンダーと教育　岩波書店 2009

岩見哲夫
- 驚異！透明標本　いきもの図鑑　宝島社 2009

江原絢子
- 食文化から社会がわかる！　青弓社 2009

酒井治子
- 子育て支援のための地域における食育の取組の分析・評価に関する研究報告書　東京家政学院大学 2009
- 保育所における食育に関する調査研究報告書　日本保育協会 2009

須永和宏
- 子どもを救う「家庭力」　慶應義塾大学出版会 2009

関口研二
- 古筆の流れ　芸術新聞社 2009

大宮司勝弘
- 山田守の戦後建築作品における設計過程に関する研究　東海大学大学院 2009
- 今に生きる山田守の建築　野田市郷土博物館 2009

西海賢二
- 寺社参詣と庶民文化　岩田書院 2009
- 地方史研究ほか　論文多数

原口秀昭
- ゼロからはじめる「木造建築」入門　彰国社 2009
- 건축디자이너를 위한 RC 조 건축이해　기문당 2009
- 漫畫結構力學入門　積木文化 2009

藤掛洋子
- フィールドワークの技法と実際Ⅱ　ﾐﾈﾙｳﾞｧ書房 2009
- 特集アジアの出産　勉誠出版 2009
- 地球市民として生きるジェンダー視点に立ったコミュニティ開発　東京家政学院大学 2009

山村明子
- 被服制作教育からの地域社会への発信　東京家政学院大学 2009

空から本が降ってくる ―電子書籍端末の行く末―

土屋　富雄

最近のニュースより

「ニューズウィーク日本版」2009年11月18日号に「本と雑誌と新聞の未来」と題した特集記事が掲載された。グーグルが進める蔵書のデジタル化やアマゾン・ドット・コムの電子書籍端末「キンドル」の登場によって、書籍出版は脅かされ、雑誌の廃刊ラッシュは止まらず、新聞は瀕死の状態に陥っているという、米国における出版界の問題点について多面的な分析が論じられている。

日本においても年末から年始にかけて、電子書籍や電子書籍端末に関する新聞記事が数多く掲載された。

・ソニーが電子書籍端末「ソニー・リーダー・デイリー・エディション」の発売予告（販売価格399ドル＝約3万8000円、キンドルより100ドル安価）
・アマゾンが雑誌大（9.7インチ、約24cm）の「キンドルDX」を発表
・アップルが来年春にも高機能携帯電話（スマートフォーン）「iPhone」より画面が大きく、電子書籍にも対応する新型端末を発売する見通し
・米国書店大手バーンズ・アンド・ノーブルは電子書籍端末「Nook（ヌック）」を年末商戦に合わせて発売
・アマゾンが対応言語も増やした「デジタル・テキスト・プラットフォーム」を全世界で展開、「キンドル」向け著作の自費出版会社や作家の募集を開始
・韓国のLGディスプレーが画面サイズ19型（通常の新聞の半分のタブロイド判）、厚さ0.3mmの折り曲がる電子ペーパーを開発、新聞を閲覧する用途を見込む
・日本の大手出版社21社が、電子書籍市場の拡大に対応するために「日本電子書籍出版協会」を発足

そして1月末、ついに本命の「iPad」登場。このままいけば「2010年は電子書籍元年！」と言えそうであるが、果たして……。

見えるラジオと携帯情報端末

10年程前に出版関連の企業とお付き合いしたことがあった。その時に話題になったのが標題の「空から本が降ってくる」である。

当時は、1994年からサービスを開始した「見えるラジオ」（東京FMなどが提供しているFM放送の空き周波数を利用した文字情報発信）を利用した放送局型のデジタル書籍の配信がイメージされていた。

受信端末機としては、それと前後して普及し始めた携帯情報端末いわゆるPDA（Personal Digital Assistant）が想定されていた。

PDAの元祖は1993年から1998年にかけて販売されたアップルコンピュータ社のNewton、次が1996年から販売されたPalmである。日本ではNewtonもPalmもほとんど普及せず、1993年に発売され電子手帳の代名詞となったザウルス（シャープ社製、2008年12月には生産停止）などの携帯情報端末が一定程度普及した。

フリー百科事典『ウィキペディア』によると「携帯情報端末」の主な機能として以下のものが挙げられている。

・PIM（Personal Information Management- 個人情報管理）機能：スケジュール管理、ToDo管理、住所録
・メモ：文章作成、手書きメモ
・電子辞書　・電卓　・カメラ　・ゲーム
・マルチメディア：MP3演奏、静止画・動画閲覧
・インターネット接続：Web閲覧、電子メール送受信
・GPS

これを見てすぐ気が付くことは、まさに現代の携帯電話そのものである。否、日本の携帯電話はさらに次のような機能を持っている。

・cHTMLメール（デコメール、アレンジメール等）
・時計代わりの利用（目覚まし時計）
・デジタルカメラ（静止画、動画、QRコード読み取り）
・地上波テレビ・ラジオ放送の視聴等
・テレビ電話
・電子マネーサービス（おサイフケータイ）
・赤外線通信

したがって、日本において米国製の携帯情報端末が普及せず、電子手帳まで駆逐されたのは当然である。

電子書籍と電子書籍端末

そして話題の電子書籍端末であるが、これは電子書籍＝デジタル化した書籍や新聞のデータを、どこでもネット上

資料の紹介

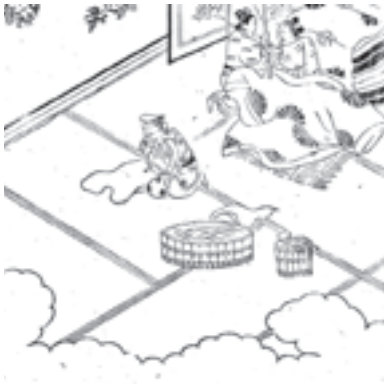
『小児必要養育草 巻一～六』　正徳４年(1714)版

香月啓益(牛山)纂

大江文庫所蔵

小野　眞理子

(ア)誕生の場面



『婦人壽草』

(イ)授乳の場面

『小児必要養育草 巻一』

(ウ)発診がでている場面

『小児必要養育草 巻四』

近世、日本では子育て論が広く社会に向けて書かれ流行するようになる。『小児必要養育草』は、江戸中期の医師香月啓益（1656～1740）によって著された小児の誕生・生育・病気・教育などに関する体系的記述であり、日本で最初の育児書と言われている。全六巻のうち、一・二巻は主として誕生から生育・養育について、三・四・五巻は小児の諸病について(四・五巻はすべて当時最も恐れられていた天然痘について述べられている)、六巻が教育についての記述である。『小児必要養育草』について、本学図書館大江文庫には、正徳４年(1714)版と複製版と現代語訳「子育ての書 1」山住正巳・中江和恵編注東洋文庫 285, 平凡社 1981 が備えられている。

啓益は医師であるが、『日本の教育学の祖』とされる貝原益軒に儒教を学んでおり、『小児必要養育草』もその根底には、家族道徳による「親への孝」「主君への忠」を中心とする儒教主義があると思われる。ただし、一巻「小児養育の総論」の冒頭には「およそ人の親の子を愛する事、天理の自然にして、あえて当ててすることにしもあらず。上はかしこくも天子・皇后より、下はあやしの賤の男・賤の女に至るまで、ひとつにみな替わることなし。」とあり、封建社会であったにもかかわらず、親が子を思う「愛」という普遍性に基づく人間平等観が基本となり、それが全巻に貫かれている。啓益は本書があまねくゆきわたるよう形式的には挿絵をふんだんに用い、振仮名をふっている。内容的には「孟母三遷の教え」や「司馬光公の妄語をしかる父の話」など、具体例を用いて分やすく表現している。このように内容・形式ともに武士のみでなく町人や上層農民など、多くの庶民に開かれた育児書である。

更に啓益は論述を進めるにあたり多くの中国の医書を数多く引用し、具体的方法については我が国の庶民文化に育まれた経験知などを紹介し、風習などのうちで害あるものには注意を喚起するなど、博識と豊富な経験と実証によって子育ての指針とするような裏づけを試みている。同著者による『婦人壽草』享保 11 (1726)（本学大江文庫所蔵）は当時の代表的な産科養生書であり、両書からは当時の我が国の産児習慣および育児習慣についても知ることができる。例えば、図ァは『婦人壽草』に記載されている出産場面、図ィは本書の乳母が乳を飲ませている場面、図ゥは子どもが天然痘になり発疹が出ている場面である。つまり、『小児必要養育草』と、10 数年後に著作された『婦人壽草』も合わせて、近世の庶民に開かれた子育て体系ととらえることもできる。児童学を探求する人たちにとっては、両書を合わせて学ぶと新たな発見が得られそうな楽しみな史料である。

（教授）